

みんな共通の幸せ。

雲雀丘学園高等学校 二年 永松 みなみ

私は幼少期、母によく「死にたくない」と言って泣く子だった。「人間は死ぬ」ということを知ってから、漠然とした死に対する不安があつた。しかし、年齢を重ねていくうちに、生きていることが当たり前で、生きられることが当たり前だと思うようになっていた。この夏、そんな私の考えを大きく変える出来事があつた。

私は夏休みに、母と愛媛に帰省した。しかし、祖父母宅に到着してすぐに、宮崎県日向灘を震源とする地震が起こった。愛媛県でも震度3を観測した。その後、南海トラフ地震臨時情報の調査が始まった。南海トラフ地震が起こると、祖父母宅まで津波が押し寄せる危険がある。しかし、祖母は「おばあちゃんとおじいちゃんは避難せんよ。できないし。」とおどけて言った。津波が来るかもしれないのに。生きられるかもわからないのに。祖母は「笑い事じゃないけど、笑ってないとやっていけん。」と言った。私は泣きたくなった。

私の祖父は九年前、事故に遭い、車いす生活になった。祖

母は毎日、祖父の食事の準備や、ベッドから車いすへの移乗介助をしている。避難所へ行くにも、悪路を通る必要があり、振動で身体が痛む祖父には難しい。たとえ避難所へ行けても、介護用ベッドがないと寝ることもできない。祖父は介助が必要のため、祖母も一人で避難することはできない。だから祖母は、避難できないことは仕方ないことだと思い、諦めてしまっている。私は、生き延びることを、生きることを諦めないでほしいと思った。

この経験を通して私は、みんなが安全を確保でき、安心して生きられることが、健常者と障がい者、みんなに共通した幸せだと感じた。「障がいがあるからできない」ことを、社会全体で減らしていくことで、障がい者の方の不安を少しでも減らしていく必要があると思う。いつ起こるかわからない自然災害に備えて、障がい者の方も安全に、安心できる場所に避難できるよう、障がい者の方と地域の方と連携を図る機会を作ったり、避難所の改善するべきことについて考え、それについて声を上げられるような人に私はなりたい。誰一人取り残さない社会をつくるために、これからも私は、色々な

人の立場に立って物事を考える大切さを忘れず、自分ができることについて考えながら生きていく。